

福井の先人を

支えた女性たち

〈逸話の中に見えてくる先人の原点〉

福井の先人、松平春嶽、梅田雲浜、由利公正の活躍を支えた3人の女性にスポットを当てます。

最初に、福井藩主、松平春嶽の正妻、勇姫。

勇姫は、熊本藩主、細川斎護の三女で、春嶽13歳、勇姫7歳の時、2人は婚約しています。その後、当時全国的に猛威を振っていた天然痘に罹患。一命はとりとめたものの、顔に「あばた」が残ったことから、細川家は、婚約解消を申し出ます。しかし春嶽は、「いったん婚約した以上は、相手がどんな身体になろうとも結婚する。」と返答し正妻に迎えました。

福井藩に輿入れした勇姫は、和歌



や読書をよくして教養を深めたほか、藩の家政分野での儉約を勧めました。また、熊本藩より横井小楠を招へいする際、藩主である父親にかけ合つたといえます。春嶽の進めた財政改革や人材登用の裏には勇姫の内助の功があったと言えるかもしれません。



琴を弾く春嶽の正室・勇姫 (福井市立郷土歴史博物館蔵)

次に、尊王攘夷の指導者、梅田雲

浜の妻、信子。

信子は、大津の儒学者上原立斎の娘で、こんな逸話が残っています。小浜藩を追われ貧しい日々を送っていた雲浜ですが、家に儒学者を招き接待しなければならなくなりました。信子は自慢の琴を質に入れ酒代に変えたものの、客が信子の琴を聞きたいと言いつ出したため、着ていた着物を質に入れて琴を請け出し、襖の外で襦袢姿で琴を弾いたということです。信子は雲浜が全国を飛び回る中、病床に伏し、29歳の若さでその命を終えますが、美人の誉れ高く、夫に尽くし、困窮した梅田家を支えたと伝わっています。

最後に五箇条の御誓文の草案の起草者、由利公正の母、幾久。

幾久は、三岡家の貧しい家計を当時一人で切り盛りしており、女中を雇うことなく、家族の衣服一切を手織りで縫い、自家菜園で収穫した野菜等で食卓を賄いました。母の草むしりを手伝いながら由利は考えるようになり、農民は田畑を耕し生計を立てるのか、武士は一体何を生み出しているのか。武士は一体何の役に立っているのか。この経験が、「武士の本分とは領民への慈しみである。『民富めば国富む』の由利の信念の基になります。領民の生活を

第一に考える由利の原点は母、幾久にあったのかもしれませんが。

関連史料・ゆかりの地

由利公正宅跡



母幾久とともに暮らした由利公正邸。坂本龍馬も横井小楠の案内で足羽川を渡り、訪ねたといわれています。実際の家の場所は、明治の河川改修工事により川の中に消滅し、今は、堤防に石碑が残るのみです。

【住所】福井市毛矢2丁目(幸橋南詰下流側)
(JR福井駅より徒歩11分)

参考資料等

東郷周一郎編『慶永公御実』私家版、和順高雄・シュガー佐藤『幕末福井伝 翔る志』福井県三上一夫・舟澤茂樹編『由利公正のすべて』新人物往来社